

「十字架こそ、我が救いのしるし」

創世記 4章 1節～16節

説教 久保田拓志 先生

しるしには、しるしをつける者の意図や思いが現れ、しるしをつけられた者の本質が示されます。カインとアベル。この兄弟は、兄カインが弟アベルを殺すという兄弟殺しの悲劇の主人公として、あまりにも有名です。2節には、弟アベルは「羊を飼う者」となり、兄カインは「土を耕す者」となった。と記されています。しかし、神は、アベルとその献げものを顧み、カインとその献げものは顧みませんでした。ここで注目すべき点は、神は、ただ献げものだけに注意を払われたのではなかったということです。

神は、アベル自身を顧み、カイン自身を顧みなかったのです。一体、これはどういうことでしょうか。うっかりすると、あたかも、神ご自身が、カインを絶望の淵に、罪の淵に追いやったかのように考えられます。神の選び、神の顧みに対して、人間は一切干渉することはできないという神の絶対性と聖なる神の厳しさとに、私たちは直面します。カインの献げものや信仰が、アベルのそれに比べて劣っていたのかどうか、ということが、ここで問題になっているわけではありません。カインに問われたのは、神の顧み、神の選びの厳しさに直面した時の、カインが神に向かって発した怒りと、弟アベルに燃やした嫉妬の炎だったのです。

しかし、神は、なおもカインに語り続けます。「正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません。」(7節)この「正しさ」というものについて、カイン同様、私たちも、しばしば勘違いをしてしまいます。神のご支配、神の憐みから外れ、自らの正しさを求めて、一歩踏み出そうとした途端、罪があなたを慕い求めるといふのです。

アベルがいなくなったこの地上の世界で、神の深い嘆きの言葉が響きわたります。アベルの絶望の叫び声が、地の中から、神の耳に届いたからです。11節から12節にかけて、神はカインにこう告げています。「今あなたはのろわれて、この土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」。神に呪われて、カインは始めて、神の前で罪を告白します。しかし、神はなお、カインに救いの手を差し伸べ

ようとしませぬ。神はカインに告げます。「だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう。」(15節)七倍とは、神の完全性、徹底性を示す数字です。カインを殺す者は、神ご自身が立ち向かって、完全な復讐を果たす、そこには例外はあり得ない、と神ご自身が、全世界に向かって宣言されています。さらに、その宣言を徹底させるため、神はカインに一つのしるしをつけられました。カインにつけられたしるしとは、神の呪いのしるしでもあり、同時に徹底した守りと祝福のしるしでもあるのです。

時代は移り、クリスマスの出来事が与えられました。イエス・キリストが、この世界にお生まれになった目的はただ一つです。私たちの罪を担い、私たちが受けるべき神の呪いを一身に受けるために、イエス・キリストはお生まれになりました。申命記21章22節には、木にかけられた死体は呪われなければならないとあります。本来受けるべき神の祝福ではなく、神の呪いを受けて、木にかけられる。それが、十字架の意味です。イエス・キリストの十字架とは、私たちにとって、神の一方的な罪の赦しと救いのしるしです。ですから、わたし達はカインのしるしをもはや必要としません。カインが受けた、呪いはもはや私たちには注がれることはない、そしてカインのように、居場所を失って放浪する必要もないのです。

ルカによる福音書が伝えるところによれば、最初のクリスマスの夜、主の栄光の光が、名もなき羊飼いたちをめぐり照らしました。2000年前、満天の星空のもと、天空に響き渡った御使いの言葉をお聞きください。「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。」(ルカによる福音書第2章10節～12節)

この神の愛のしるしであるイエス・キリストの十字架の恵みを感謝と悔い改めの思いをもって受け取り、神の御守りと導きのうちに歩むことができるように、祈り求めましょう。

(記 久保田拓志)